

『能・リア王』再々演を観て

Seeing *Noh: King Lear* for the Third Time

遠藤 光

ENDO Hikaru

Abstract: This was the third time for me to see UEDA's *Noh: King Lear*; therefore I had no more expected to be moved. However, the moment Madame ADACHI as Cordelia appeared on the stage from the left at Kioi small Hall on April 29th, I tensed up completely, and was so moved that I could not bear sobbing or crying silently. Madame ADACHI produced her words so beautifully and so melodiously, calling to the herbs still unknown to humans: "All blessed secrets, / All you unpublished virtues of the earth, / Spring with my tears!" What a touching, what a moving scene in the very beginning of the play! The later scenes were so pitiful, and so sad, but the most pathetic one for me this time was the *kiri* (last) scene where Master ENDO as Lear, holding a *karaori* -kimono which shows dead Cordelia in his arms, came out and cried, "Cordelia, Cordelia! Stay a little. Ha!" Then I felt completely relieved when the ghost of Cordelia appeared, saying "Look up, my lord. Come this way", and danced together with the ghost of Lear. I was convinced that sharing the joy of life with the audience, as Professor UEDA argues as the aim of Noh, was perfectly performed. The house was full and there were so many people who could not enter there, I wish the play be repeated every year as long as Madame ADACHI, the eldest female Noh performer of Japan, and Master ENDO are up and doing.

Keywords: 足立禮子、『能・リア王』、コーディーリア、遠藤喜久、リア王、救い、上田邦義 ADACHI Reiko, *Noh: King Lear*, Cordelia, ENDO Yoshihisa, King Lear, spiritual saving, UEDA Kuniyoshi

上田邦義氏作『能・リア王』は、私には三回目の鑑賞なのだから、さすがに感動できるかどうか心許無かったし、能舞台ではなくステージ（紀尾井ホール）での演能ということで、果たしてどうなのかと期待も半ばであった。ところがどうであろう、シテのコーディーリア（足立禮子師）が左側から現れたその瞬間に、私の心は緊張と感動に満たされたのであった。本来橋掛りになっている位置に、薬草の舞台装置が実に巧みにしつらえてあって、それを見ながら、

既に聞き覚えのある、あの、甘やかでとろけるようなコーディーリアの声が発せられたのである。

そこへ、ツレの老リア王（遠藤喜久師）が現れ、力強くて太い声で、娘たちに裏切られ騙されたことへの義憤を吐き出すのであるが、これが誠に悲壮美に満ち溢れていて、圧倒されたのである。続くコーディーリアとの掛け合いの場面は、もはや余りに迫真に満ちていて、手に汗を握るばかりであった。

終わりの方で、リア王が死したるコーディーリアを表わす唐織を抱いて、「人の生き死にが初めて分かった。もうこの世にはいない。コーディーリア。お前の声はいつも静かに。柔らかく優しかった。それは女の美德。ああもうこの世にはいない。」と謡うが、「コーディーリア。」の箇所ではひときわ高い音程で謡った。その途端、私は感動のあまり、こらえきれなくなって嗚咽に襲われた。しかしその後の、御霊になった二人の早舞と相舞に至って、私の心はすっかり晴れ晴れし、喜しくなって誠に後味の良いものとなったのである。そしてこの『能・リア王』の三回目を観ているという意識がすっかりなくなって、再び新鮮な気持で観賞できたことが全く不思議に思われたのである。

もしかしたら、能舞台ではなくステージで行われたことで、却ってコンパクトになり、観客との距離もせばまって、観客は能楽師や地謡いや囃子と一体になって、共に演じているかのように感じられたからかも知れない。上田氏が日頃から目指されていること、即ち「能を通して万人と喜びを分かち合うこと」が、ステージという、能舞台を離れた所でも、その目的が思わぬ形で実現したのであろう。

再々演の当日（2009年4月29日）は観客が会場外に溢れ出て、キャンセル待ちでも間に合わず、気の毒な人々が沢山いた。そこで私は、この紀尾井ホールでもよろしいので、もう一度、いや、今後、年に一度の恒例にして、足立禮子先生と遠藤喜久先生のお命の続かれる限り演じてもらえたなら、と本気で思っているのである。上田先生、ぜひお願い致します。

（2009年5月9日）